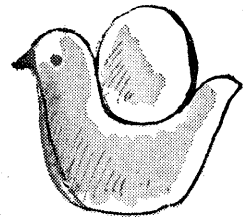


# 幼児と音楽

## “心から歌う”



相馬 誠子

時々、私の家に遊びに来る三歳の稚子ちゃんは、音楽が大好きで「レコードかけて」とせがみ、歌ったり、踊ったり、心から楽しんでる。全く即興である。思い出したように「ピアノが弾きたい」といい出す。楽譜を前に立て、いかにも弾いているような格好をしながら歌ったり、二本の小さな指で、低音から高音まで、たどたどしく音階を弾いたりする。本当に心から音楽を楽しんでいるとは、こういう姿をいうのだろう。私が音楽を好きなことを知っていて必ず誘う。私もいっしょに楽しんでしまう。

こんな時「あら、この子は音楽的素質をもっているから、ピアノを習わせたらのびるのじゃないかしら？」とはや合点をし、ピアノリストにでもなるような夢をえがいてしまう人がいるようだ。

ある先生はいう。

「幼児は未分化だから、一本一本の指に、全神経をかたむけて弾

くということに、興味のある子どもはとびつくかもしれないが、そうだからといって継続するかどうかはわからない。

「無理に続けさせることによって、音楽をきらいにしてしまうこともある。興味をしめたからといって、技術をのばす方にあわてるのはどうか」

私は、この言葉を聞いて共感した。音楽は心の表現であり、心から楽しむものであるということが第一に考えられると思う。しかし技術をのばすことによって、表現力が高まり、一層楽しく心を表現することができるとはあるが……。

子どもの発達とか、能力、興味の程度というものをよく考えないで、まるで流行のようにとりいれていくから、まちがった音楽教育になり、音楽きらいにしてしまうのである。こういうことについても、指導者としては態度をはっきりもって、他に（親など

(c) 対することが必要であろう。

例に出した稚子ちゃんのように、心から音楽を楽しんでいるところから、どう育てていくかということが大切な問題である。

音楽が好きになるようにするために、特に、楽しい歌の指導はどうあったらよいかについて考えてみよう。

## I 歌いやすくて、楽しい歌をとりあげる

幼稚園でも最近では、リズムや音程のむずかしいと思われる歌を、先生の好みによって子どもに教え、「こんなに歌えるのよ」と自己満足をしている人がいる。幼い子どもだけに、何でも先生の意の通りうけられるが、その無理のしわよせが心にたまり、明るい楽しい表情が消えていく。上手に歌ったとしても、心はからっぽで、ただ口先で歌っているにすぎない。『幼児の顔』は、指導の評価につながると思われる。楽しく積極的に活動するとき、明るく、みだされた柔らかい顔になるし、つまらない時は、生気のない固い顔となることを忘れず、たえず自分を反省してきた。

最近テレビやレコードを通して聞く歌の中にも、音程が急に上がった下がったりする歌や、高い音程が続いたり、休止符がたくさんついている歌がある。聞いているのにはおもしろく、ひ

きつけられるので、子どもたちは繰り返し聞きながら少しずつ覚え、やがてはいっしょに歌えるようになる。全く自然に覚えていくのである。しかし、中には、音程がとれず、リズムとことばだけで歌っている歌もある。これと反対に、聞きながら覚えるのではなく初めて教える歌としてとりあげる場合は、メロディもリズムも歌詞も簡単で、三、四回ですぐ楽しんで歌える歌が望ましいと思う。昭和二十七年度の音楽リズム指導書に、幼児の音楽的発達段階に即した基準が、文部省から出されている。音域は六度以上がよいといわれているが、六度の歌は現実になく、八度の歌が最も多い。八度でも、歌詞やリズム、メロディーが子どもに魅力あるものであればよいと思う。(例、たき火。ふしぎなポケット、お正月など)好きな歌は、子どもも自分から覚えようとすることから……。

子どもがのってこない歌は無理にしないで、いさぎよくあきらめ、かえた方がよい。

## II 心から楽しく歌えるような指導のくふう

幼児は総合的な活動を楽しむから、絵を見ながら歌ったり、動きながら歌ったり、ペープサートを動かしながら歌うことを喜ぶ。私は四十年前の小学生時代をいつも楽しく思い出す。四十年代

# ほうかほか

与田 準一 作詞  
渡辺 茂 作曲



1. じゃ むばん あ んばん く りー む ばん  
2. じゃ むばん あ んばん く りー む ばん



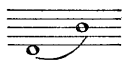
や き た て で き た て ほー か ほ か  
お み せ に な ら ん で ほー か ほ か

望ましい歌の例

○拍子 (2拍子)

○長さ (8拍子)

○音域 (6度)



○主となるリズム



日本音楽著作権協会承認番号第486190号

の、おじいさんのような音楽の先生だったが、歌う時はいつも心から表現していた。

「さあ、ここはたんぼだ、みんなで田植をしよう」といって先生は『田植』の歌を声高く歌いながら動き出した。私たちもいっしょに教室じゅう田植の動きをしながら、楽しく覚え、心から歌ったことは、忘れられない思い出のひとつである。

ただ、口うつしに教えるのでは、本当の歌の心を感じとることはできないと思う。指導者自ら歌の心に入り切って歌うときに、歌う楽しさは倍加し、心のはいった歌となる。私たちは、子どもに歌わせるのではなく、自ら楽しく歌うとともに、子どもが楽しく歌うにはどのようにしたらよいか、指導のくふうを心がけた。

### Ⅲ 先生自らリズムや音程に気をつけ、

#### ことばをはっきり歌う

子どもは、先生の歌い方をそのまま感じとって歌うものである。発声も、口のあけ方も、リズムもすべて、先生の歌い方によって、子どもの歌い方がきまる。先生が、のどに力を入れて歌っているのに「もっときれいな声で、らかな声で歌いましょう」といっても無理な話である。理くつのわからない時代で、感じとっ

て覚えるものだけに、先生自身が歌うことをマスターしなければ、このねらいは子どもに望めないと思う。

#### IV いつでも歌える環境をつくる

覚える段階でも、また覚えた歌を歌いたい時にも、いつでも歌えるようにするために、カセットに歌を吹きこんで、子どもに自由に歌わせたり、レコードを用意して、歌いたい時にいっしょに歌える環境を作るとは、自発活動を盛んにするためにも大事なことである。

ピアノやオルガンの前に先生が腰かけなければ、歌が始まらないのでは、わく内だけの歌になり、生活化されない。

パンやさんごっこをしながら、「パンの歌」を歌ったり、乗物ごっこをしながら、「はしれ超特急」のレコードに合わせて歌ったり、遠足に出かけながら遠足の歌を歌ったりする時に、歌と生活が自然に結びつき、歌の心が、実感として子どもの心にわきたつのである。

以上のことから、歌の指導を深く考えていくと、子どもにどうこうと要求する以前に、先生の歌に対する『興味や関心の程度』、『楽しい指導のくふう』、『歌唱表現の能力（らかな発声、リズムや音程の正確さ、詩情を表わして心から歌うなど）』をもう

いちど見直してみる必要はないだろうか。

いつの時も、先生のすることは大きな環境として子どもに影響していくのである。  
(江戸川区立鹿本幼稚園)

私は、昨年十二月十六日に「佐藤義美のうた音楽会」という、心あたたまる音楽会にまいりました。童謡として歌っていた時には気づかなかった美しい詩がいっぱいあるのに、今さらのように驚きました。

故佐藤義美さん作詩の歌ばかりの会で、出演者も子どもたちにおなじみの深いタレントばかりでした。ところが私の隣では

“今日はテレビに出てくる人がいっぱい出てくるから、おとなしくてなきゃだめですよ”

“フーン、じゃあ、ヤシロアキ てる?”

“いいえ”

“じゃあ、アンザイマリアは?”

ああ、テレビ時代！ 私は、テレビの歌手のまねをするテレビの姿が目にかびました。そして私たち大人の“郷愁”なのでしょうが、歌によっては、涙が出そうになったこの音楽会も、大分客席はさわがしかったのです。  
(赤間峰子)